

## 徒然草

### ニューヨークへの想い

敦賀和外  
学外学修センター特任教授  
津田塾大学

私はニューヨークが嫌いだった。都市としてのニューヨークではなく、ニューヨークにある国連が嫌いだった。

2002年から2006年まで国連開発計画(UNDP)アフガニスタンで勤務していた。当時は9.11後、ボン合意を経てアフガニスタンの復興が始まったばかりであった。初めて降り立ったカブール、見るものすべてが新鮮だったが、とりわけヒンドークシュの山並みには息を呑んだ。これからこの国の復興の支援に関わることができる、と気持ちが高まったことを今でも思い出す。

それから3年強カブールで地雷除去、早期雇用創出、総合地域開発、武装解除・動員解除・社会復帰(DDR)などのプログラムに関わったが、苦勞の連続であった。銀行システムがないために地方の受益者(労働者)に迅速に賃金が払えない、交差する各国連機関の思惑でプログラムが前に進まない、必要なサービスや物品を調達したくても煩雑な手続きで手元に届くまでに数か月もかかるなど、「現場」の苦しみを常に感じていた。今思えば、自分もJPOとして仕事を始めたばかりで能力不足な部分も多く、且つ当時のUNDPアフガニスタン事務所は人員が限られる一方で執行しなくてはならない予算が300億円近くにのぼることもあったので致し方ない部分もあったかもしれないが、当時の私はその苦しみを「現場を知らないニューヨーク」のせいにしていた。

「政策対話が大事だ。」、「ナショナル・オーナーシップが大事だ。」それは間違いないし、そうすべきだと思う。でもニューヨークのスタッフは5時に帰ってあとはマンハッタンで楽しく暮らしているのでしょ？こちらは常に危険と隣り合わせで、オフィスと自宅以外に簡単に出歩くことはできない状況のなかで必死に毎日やっているのですよ！とよく愚痴っていた。現場で思うままにならない焦燥が、ニューヨークへの反感を強めていった。

「受益者に寄り添って仕事をしたい」という気持ちを常に持っていたので、現場の苦悩に理解のないUNDP本部からの指示や、2003年前後、イラクに対する対応が注目を集めるなかでアフガニスタンの復興が置き去りにされている感のあった安保理での議論など、当時ニューヨークを忌避する理由は枚挙にいとまがなかった。「ニューヨークでは絶対に働かない」と思っていた。しかし、時間が経つにつれ、ニューヨークで何が起きているのか十分に理解せず一方的に嫌ってはいけなさと考えるようになった。「食べず嫌い」はよくない、やはり一度ニューヨークで働く必要があるのではないかと考えるようになっていった。

その後幾つかの仕事を経て、2008年にニューヨークの国連日本政府代表部に任期付職員として勤務することになった。公募を見つけた際、「これだ！」と思った。ニューヨークで、かつ国連職員とは立場が異なる代表部員（外交官）として国連に関わることができるのであれば、自分のニューヨークに対する考えに新しい視点を加えられるだろうと。

2008年から2年間、政務担当として安保理の中東和平やアフリカのPKO、そして平和構築委員会（PBC）での政策議論、外交交渉に関わった。加盟国側と国連職員、安保理とUNDP、と言わば対極的な立場で国連に触れることになった訳であるが、確かにそこには大きな違いがあった。当然ながら代表部では「日本外交」の視点であるし、安保理は開発ではなく政治・安全保障の視点から各国の案件に関わる。2008年末に勃発したイスラエル軍によるガザ侵攻に関する決議交渉には、個人の想いとは異なる座標軸で臨むのは当然であったとしても、心の奥底で悩んでいる自分がいた。アフリカのPKOのマンデート交渉をする際には、常任理事国間の議論で決着される現実も目の当たりにした。PBCでは、支援国の現状よりも、先進国と途上国の罅迫り合いが優先される場面に辟易したものである。

このように書き連ねていくとネガティブなことが多いように受け取られてしまうかもしれないが、ニューヨークでは政策決定に関われるという意味で大変学びの多い体験であったし、その意味においてはニューヨークもひとつの「現場」である、という視点を持てるようになった。そのような視点を持ちながら、アフガニスタンで培った「現場感覚」を持って政策議論に臨み、UNDPなどが行う開発支援も大きな文脈のなかで捉えるように心掛けた。

手前味噌的な持論ではあるが、平和構築の実行者たるには、ニューヨークとフィールド双方の経験が不可欠であり、可能であれば加盟国（あるいはドナー）と国連職員双方の立場を経験しておくと思ふ。

ニューヨークは相変わらず嫌いである。他方で、なぜ嫌いなのか明確になったと同時に、「嫌い」を「好き」に変えたい、と思うようになった。その想いは、これからのキャリアで実現していきたい。